

本書を通じて、青森は活動的な湊・町であり、松前・蝦夷地を取り巻く環境変化の影響を強烈に受けたダイナミックな地域であったと、筆者は心に刻んだ。

近世青森研究の新たな指標となる一冊であろう。先に刊行された資料編も随所に有効活用されている。その資料編を手に取りながら、また地図も手にして、じっくりと読み進めていくことをお勧めしたい。

(A5判、七二六頁、二〇一二年三月、青森市史編集委員会、

五九九五円)

(おかざき・ひろのり 大倉精神文化研究所)

『青森県史 資料編 中世3 北奥関係資料』

遠藤ゆり子

本書は、『青森県史 資料編』中世編のうち、南部氏関係資料(中世1)、安藤氏・津軽氏関係資料(中世2)に続く、第三冊目の巻である。次に、本書の目次を示した上で、内容を紹介していきたい。

第I部 南部・安藤・津軽・浪岡北畠・松前氏関係資料補遺

- 一 南部氏関係資料補遺／二 安藤氏関係資料補遺／三 津軽・浪岡北畠氏関係資料補遺／四 松前氏関係資料／五 熊野那智大社文書補遺／六 解題

第II部 諸家資料

- 一 鎌倉時代家わけ文書／二 南北朝時代家わけ文書／三 室町・戦国時代家わけ文書／四 解題

第III部 日記・記録・法令関係資料

- 一 幕府法令関係資料／二 鎌倉・南北朝時代日記・記録／三 室町・戦国時代日記・記録／四 吾妻鏡／五 太平記／六 津軽一統志(首巻・附巻)／七 永禄日記／八 有職書・儀式書・往来物／九 解題

第IV部 宗教関係資料

- 一 寺社資料／二 高野山関係資料／三 津軽領内延宝・元禄寺社縁起書上／四 解題

第I部は、中世1・2の補遺資料と、新たに加えられた松前氏関係資

料から成る。一・二には、主に連歌や寺社など文化関係の資料、系図、記録類が新たに収められた。特に一では、県外に伝来する資料も集められている。

第II部では、青森県に関連する文書を収集し、所蔵者ごとに整理されている。具体的には、例えば「出羽・奥州果端々^註」(一六九八号文書)といった表現も含め、青森県域を示す地名が見られる文書、第I部に所収されていない家の関係文書が採録されている。このような資料集も、同県域ではこれまで見られなかったものである。

第III部は、陸奥国に関する鎌倉・室町幕府の法令、中世の日記・記録類のうち、青森県について記述する部分を抽出した資料から成る。ここに所収された資料は、既に翻刻されたものが知られているが、特に三は、原本によって改めて翻刻し直し、字句などの訂正を施したものが多い。

第IV部は、一で、山岳宗教の拠点であった岩木山関係、十和田山関係の資料を中心に、中世〜近世初期の県内寺社に関連する文書・記録・画賛や金石文などが収載されている。天正二〇年以降の近世資料を伝える八戸小田八幡宮の所蔵文書は、悉皆調査が行われていないといい、資料保存の観点からも、今後の調査が期待される。

二では、佐竹家・秋田家や松前家の資料を伝える高野山清浄心院、津軽家と師壇関係にある高野山遍照尊院の所蔵文書などが所収されている。近年は、高野山関係文書の調査が進んでおり、それらの成果と併せた分析が今後は必要であろう。三は、延宝期に弘前藩寺社奉行によって収集された寺社縁起の書上、元禄期に各宗派で編纂された寺社縁起書上のうち、中世の記述分をまとめたものである。一部、『新編弘前市史』(資料

編3、二〇〇二年)にも採録されているが、県内全域の寺社を対象とし、同地域では古い延喜の寺社縁起が紹介されている。これらは、中世社会を知る上での重要な手がかりとなる。

以上、目次に沿って内容を紹介してきた。次に、本書全般についても言及してみたい。まず評価すべき点として、資料の原本は未だ所在不明なもの、近年の調査によって見つかった、写しや写真が採録されていることがあげられよう。例えば、第I部一では、「遠野南部家文書」調査で新たに見つかった資料が、二では、やはり新発見である大島正隆氏(一九〇九〜四四)の採訪資料十四点(抄録文は『青森県史』資料編中世2に採録)が収められている。三でも、改めて写真の存在が明らかとなり、追而書の存在が判明した資料も紹介されている。第IV部では、現在所在不明の資料が、未公刊の卒業論文添付写真と資料翻刻として載せられるなど、近現代における調査の成果が活かされている。

東北地方においても、近現代における研究者の調査以降、論文等によってその存在や一部の内容は知られるものの、所在不明になっている資料が少なくない。文書原本の再発見が待たれるが、資料保存という意味でも、文書翻刻メモや写真データを残す意義が大きいこと、近現代におけるそれらの資料的価値が大きいことを改めて感じた。

また、白河氏関係文書や「飯野家文書」など、近年の調査研究によって新たに見つかった資料も多く収められている。『能代市史』や『横手市史』編纂時に集められた写真をもとにした翻刻もあり、隣接する秋田県内の自治体史刊行が進んだ成果も本書には活かされている。そして、注が詳細なことも特徴的である。文書の写真は殆ど掲載されていないが、

字配りや様式などの情報は、各文書の注に記されている。資料中の文言や年代比定についても、根拠とする論文など近年の研究成果が明示されている。資料の典拠も、例えば、東京大学史料編纂所の影写本から翻刻した際は、注に文書名と文書の請求番号、丁数とその表か裏かも記され、原本に当たりやすいよう配慮されている。

一方、気になった点は、所蔵者が明らかであり、かつ県内に所蔵者がいる場合でも、原本を確認していない場合があることである。例えば「長勝寺并寺院開山世代調」(一八八七号、長勝寺所蔵文書)は、書誌情報によれば、原本からのコピー本をもとに翻刻したという。事情は定かではないが、原本に当たること得られる情報もあり、史料の現状把握のためにも、原本確認が必要だったのではないだろうか。

最後に、津軽地方の戦国時代についても記述する「永禄日記」に触れておきたい。これまでの翻刻刊行本としては、一八二二年頃に写された横山本を底本とする『みちのく叢書 第一集』(青森県文化財保護協会、一九五六年)が知られてきた。だが本書には、東京本(「北畠永禄日記」と館越本という二系統の日記が所収されている。解題によれば、両本は浪岡御所北畠家の後裔と伝える家にそれぞれ伝来するものであり、原本調査では、関連史料から両本の作成過程も詳らかにされたという。東京本だけではなく、館越本も併せて掲載されたことで、それぞれの編纂過程も考察できるようになっている。また、解題によれば、東京本は六冊のうち前三冊が正本だが、何れの伝本も書写の過程で加除訂正が重ねられているという。東京本・館越本の両本が採録されたことで、新たに得られた情報も確認できる。そこで、次にそれらの点をいくつか紹介

してみたい。

採録された文禄二年までを見る限り、『みちのく叢書』所収本と東京本は、本文の内容は基本的に共通するが、東京本には、頭注や行間、別紙によって書き加えられた部分が散見される。館越本は、永禄元年〜九年の記述がなく、同十年から始まり、本文自体に加筆された部分が多い。東京本で、本文の書写後に加筆された部分は、館越本を参照した部分が多いようだ。例えば、元龜三年に乳井福王寺の詳細を記した部分は、館越本の本文に見える。永禄十年の記事は、藤崎系図の大意を写し取った内容、岩木山下居宮本社の棟札写しなどが、東京本では別料紙に別筆で記されて挿入されているが、これは館越本の本文に同様の内容が見える。

ただ、東京本の永禄十年別料紙記事には、古老の話として、藤崎古城の修理で人足が不足し、石川氏から割高で雇ったことを記すが、館越本には記述がない。また東京本のみの記事として、表紙の見返しに、著者立朴の子清朴の筆跡で、永禄三年の今別村八幡宮棟札にふれ、「立朴考案云」として建立の経緯が記されている。再建については「一統志」に詳しいとあり、これは「津軽一統志」首巻の内容を指すと思われる。東京本執筆にあたっては、「津軽一統志」が参照されたことも窺える。東京本天正十九年の行間記事、「九戸一乱」での戦死者や、九戸政家の子供らが津軽氏に仕えたことなども、館越本にはなく「津軽一統志」には見える。そこからの引用であろうか。

頭注や行間に加筆部分が多い東京本だが、本文自体への加筆も若干ある。上方の情報(天正十五年の二条城建立、同十六年の大仏造立、同十七年の淀城築城と朝鮮人来朝、文禄三年の伏見城築城)、大浦(津軽)

氏の政治状況（天正十七年に秋田氏と和睦、同十九年に朝鮮への従軍免許、三川兵部輔の名護屋派遣、文禄二年に京都で敦賀の屋敷を求める）などがそれであり、何れも館越本の本文にも確認できる。天正十七年の記事で、「尤為信公直ニ御出不被成候」を「尤秋田殿直ニ御出不被成候」と主語を書き直している部分は、館越本を参考に訂正したのではないかとも思われる。このように、複雑な編纂過程を辿ったと想定できる「永禄日記」については、今後の分析が待たれるところだ。

青森県のみならず東北の中世史研究は、史料の制約が大変大きい。だが、本書の成果を踏まえ、これからも資料の悉皆調査、近現代における資料調査成果の再発掘、近世に成立した記録類の分析などを進めることで、さらなる研究の進展が期待される。

（A4判、七八五頁、青森県、二〇一二年三月、五八八〇円）

（えんどう・ゆりこ 弘前学院大学専任講師）

本会機関誌『弘前大学國史研究』への投稿について
投稿規定

◎論 文 四百字詰 60枚程度を原則とする（縦書き、以下同様）

◎研究ノート 四百字詰 20枚から30枚程度

◎研究余録 四百字詰 10枚程度

◎史料紹介 四百字詰 10枚から30枚程度

◎その他（書評・研究動向・歴史随想など） 四百字詰 10枚程度

◎ワープロでの執筆に際しては、一段に付き32字×23行で組んで下さい。字数は右の規定の範囲で計算して、それを越えないようにして下さい。

◎フロッピーディスクによる投稿も可能です（事前に編集委員会へ御相談下さい）。行数・字数は、ワープロ執筆と同様に組んで下さい。なお、プリントアウトした原稿を添付のこと。

◎横書きを希望する時は、あらかじめ本会へご相談下さい。

◎原稿締切 一月末日と八月末日の年2回

※投稿に際しては、図表を最小限におさえ、完成原稿でお願いします。また、原稿は必ず御手でコピーをとって保存して下さい下さい。投稿は本会会員に限ります。

※掲載については、原稿を受領後、編集委員会が審査し、一ヶ月以内に御通知します。なお、文中に掲載許可を必要とする写真・図版等を含む場合には、掲載決定後、著者の責任において権利者から許可の承諾書を取得して下さい。

※掲載分の論文等については、抜刷50部をさしあげます。

※本誌掲載の論文等を転載する場合は、本会の諒承を得て下さい。